

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	考えに筋道をたてる : 「一休さんの話」を材料にして
Author(s)	山本, 妙子 [ほか]
Citation	児童の言語生態研究 , 11 : 64 - 68
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045127
Right	
Relation	



「考えに筋道をたてる」

「一休さんの話」を材料にして

山本妙子ほか

1. 指導案

一、日時 昭和五十六年七月三十一日午前十時～午前十一時

二、児童 山口県熊毛郡田布施町立城南小学校四年二組（山本学級）、男子十四名、女子十二名、計二十六名

三、領域 思考

四、授業形態 児童の言語生感研究会会員によるティームティーチング

五、授業テーマ 考えに筋道をたてる。

六、教材 一休さんの話

七、授業テーマ設定の理由

四年生は、イメージ思考を切り捨てようとし始める時期であり、気働きの面から見ても客観的な構えを取り始めており、物事を対象化して考えることができるようになってきている。つまり、論理的思考が可能になり始める頃である。しかしながら、感情を切り離し論理の土俵の上だけで考えようとしても、この感情が障害となってくることもまた、この時期の子どもたちの実態として認めなければならない。感情に引きづられては、論を組み立てること、考えに筋道をたてていくことはできないから、子どもたちは、この授業で、論理と感情の混乱を整理することから始め、その後の解法を考えることとなる。

まず、前提条件としての「正直村の子は、すべて本当のことを言う。うそつき村の子は、すべてうそを言う」ということが捉えられねばならない。そこから、一番目の子どもの答えが確定できるからである。但し相当学年の児童にとって、この前提条件を前提条件として整理することが、第一の関門であるだろう。これ

が、まず第一の学習内容とすることができる。しかし、一番目の子どもの発言は、一番目の子どもが正直村の子であろうと、うそつき村の子であろうと、結果的には、「ぼくは、正直村の子です。」と、一休さんに言ったはずである。この言ったはずという論理が理解されるということが、次の学習内容となる。続いて、二番目の子どもが、「あの子は正直村の子と、言ったんだよ。」と、一番目の子どものことを伝達していることによつて、二番目の子どもを正直村の子ともであると断定することができる論理がある。なぜなら、一番目の子どもの発言は、結果的に確定されているのだから、それを正直村出身だという以上、言い換えもしくはうそをついたことにならない。また、反対表明でなくてはならなくなるからである。従つて、この論理を見破ることが、すべてを氷解に導くための第三の学習内容となる。

八、指導計画（一時間扱い）

教材文を読み、設問について考える。（本時）

九、本時目標

教材文を読み、設問に対する答えを導き出すために、筋道をたてて考えることができるようにする。

十、本時の展開

学習活動（指示と発問）	指導上の留意点
（あいさつ・先生方の紹介、授業者のあいさつ） ○プリントを読む。 「先生が読みますから、よく聞いてください。」 ○一休さんが知恵自慢の人だということを思い出	○学習態度の設定

す。

「一休さんを知っていますか。」

○問題点を把握する。

「一休さんは困ったようだけど、何に困っているのですか。」

A 不明

B A 正直村の子 B 正直村の子

C A うそつき村の子 C 正直村の子

文中三人の男子 A B

C の発言が右のようになっていることを確認し、従って、B、C 両者とも正直を主張し、A が、互いに反対者であることの確認をする。

○解法の発見

「ところで、一休さんは、頭を働かして、どの子が正直村の子なのかがありました。どう考えれば、どの子がそうだとわかるのですか。」

○解法の順序を考える。

「一番目の子どもは、どう答えたいと思いますか。」
○学習者同士の是正を行う。

○解法の検証

○思考の順序性を中心に整理する。
○しならばしという考え方をつかむ。(仮定法)

○一番目の子どもの回答を、逐条的・条件的に予測させる。

○一番目の子どもとの関連で、二、三番目の

(終了のあいさつ)

十一、教材文(問題文)

ある日、一休さんが、おしょうさんのおつかいで、

正直村へ行くことになりました。途中、正直村と、うそつき村のわかれ道にきました。こまったことには、目じるしのたて札がなくなっています。ふと見ると、むこうから、三人の男の子が、近づいてきました。どの子が正直村の子か、うそつき村の子かわかりません。

正直村の子は、みんな正直にものを言いますが、うそつき村の子は、みんなうそを言います。ぜひ、一休さんは、正直村の子を見つけて、正直村に行きたいと思われました。
「きみたちは、正直村の子ですか。うそつき村の子ですか。」

一番目の子どもが、何かこたえましたが、聞こえませんが、

「あの子は、正直村の子と、言ったんだよ。ぼくも、正直村の子だよ。」

子どものことばが決っているということがわかっていくかどうかを確認する。

○一番目の子どもにも二通りの仮定ができることがわかっていくかを確認する。

○一番目の子どもにも二通りの仮定ができることがわかっていくかを確認する。

と、こたえました。すると、三番目の子は、

「あの子は、うそつき村の子だ。ぼくが正直村の子だよ。」

と、言いました。

一休さんは、こまってしまうました。しかし、頭をよくはたらかせる一休さんは、どの子が、正直村の子かわかりました。

さて、一休さんは、どう考えたのでしょうか。

十二、評価

筋道をたてて考えることができたか。

○四年生の発達状況としてみる。

○四年生の子どもの思考の筋立ての障害になっている要因は何か。

2. 授業記録

へあいさつ

T 今日勉強するプリントを配ります。何が書いてあるかな。

C ある日一休さんが……

C なんだこれは。

T では先生が読みます。君たちは黙読してください。

へプリントを朗読

C 考え方なのか。

T そう。どういふふうに一休さんは考えていったか、それを今日はみんなに考えてもらいます。

C エーッ。

T みんな、一休さんを知っているよね。

C ウン。

T どんな人。

C とんちの人。

T そうだね。とんちを働かせることができる人、頭

がいいんだな。君たちは、その一休さんに挑戦してほしい。一休さんはどこに困ったんだろう。考えてみてください。

C どこに？

T どんなことに困ったのか。では、もう一度、今度は吉川君に読んでもらいます。他の人は、困っていることに線を引いておくといいね。

吉川へ朗読

T さあ、何に困ったのかな。

谷 目じるしの立て札がなくなっています。

T そうだね。他の人はどうですか。

へ川添、挙手して同感を示す

藤本 どの子が正直村の子かうそつき村の子かわかりません。

T うん。他の人はどう思う。みんなが困っていたらだめよ。一休さんが困ったことは何かって聞いています。

◎ 何を、どのように考えて行くのか、ということにほとんどの子が悩んでいた。

C わたしは藤本君と同じです。

T はい。藤本君と同じ考えの人は手を挙げてくださいます。

へ八人の子が挙手

UT ではおじさんがみんなに応援する。一休さんはおじょうさんのおつかいでどこへ行くの。

C 正直村。

UT そうだね。一休さんは、正直村へ行く道を知っているの？

C 知らない。

UT 知らない。うん、そして正直村を目差して、一休さんは歩いていったのね。そうしたら、道が二つに分かれるところに来たのね。ふつうだったら、そこには立て札が立っていて、正直村はこっちですって書いてあったのね。ところがそれがなくなっちゃった。なくなったらうれしい？

分かれるところに来たのね。ふつうだったら、そこには立て札が立っていて、正直村はこっちですって書いてあったのね。ところがそれがなくなっちゃった。なくなったらうれしい？

C 困る。

UT うん。だから、目じるしの立て札がないのは困ることですって、谷君が言ってくれたんだね。その時一休さんはもうやめて帰ろうとしたのかな。だれか立て札を立ててくれないかと思ったかな。

C 思わない。

UT ちょうどそこへいい具合に、三人の男の子が来た。それで一休さんは、この子たちに聞けばいいと思っただんだね。

C そう。

UT して一休さんはその子どもに尋ねました。そこで三人の子が同じことを言ったら一休さんは困ったかな。

C 困らない。

UT でも一休さんは困ったね。なぜ困ったの。

C 聞こえなかった。

UT そうだね。一番最初の子は何を言ったか聞こえませんでした。でも、あと二人残っているでしょ。その二人の子が同じことを言ったら、一休さん困らなかった。

C 二人が反対のことを言った。

UT うん。二人が反対のことを言ったから、困ったんですね。そこまでわかったね。さあ考えて行きましょう。

◎ 論理的思考を始めさせるには、子どもたちが、一休さんの話の中で、一休さんが何を困り、何を解決しようとしているのかという点が把握できなければ

ならない。そのため、プリントを読ませるだけでなく、念押しの説明を加えた。

T では、一番目の子をA、二番目の子をB、三番目の子をCとして考えていきます。

へ子どもに確かめながら、A・B・C三人の男の子が言ったことばを板書した。>

T Aは？

C 聞こえなかった。

T Aの言ったことは聞こえなかった。Bはなんて言ったんですか。

C あの子は正直村の子と言ったんだよ。ぼくも正直村の子だよ。

T そう。Cはなんて言ったんですか。

C Aはうそつき村の子だ。Cは正直村の子だ。

T はい。Cの子が言っている「あの子」ってだれですか？

谷 AとBです。

T どうかな、これは。谷君によると、Cの子が言っている「あの子」は、Aの子とBの子を指すっていませんか。

C わたしは、AとBと両方だと思っています。

藤本 ぼくはBだけだと思ってる。

T どうしてBだけなの。

藤本 それは、Bがうそつき村と言ったら、もうAもうそつき村と言っていることになるからです。

◎ ここで、子どもの中から三通りの考え方が出た。Bの子が言った「あの子は正直村の子だと言ったんだよ。」の「あの子」は、Aを指しているのしか考えられない。しかし、Cの子が言った「あの子はうそつき村の子だよ。」の「あの子」は、①Aの子、②AとBの子、③Bの子、を指しているという三通

りに考えることができる。それがわかっているれば、その中から仮りにどれかを選んで考え進めるという仮定法がとれることになるのだが、まだ子どもたちはその前段階にあった。藤本君が「Bの子を指す」と言ったのは、Bの子が「ぼくも正直村の子だよ」と言った「も」を解釈して、BとAは同じ村の子であるという意味が含まれていたため、司会者は、「Aの子とBの子を指す」という仮定を取り上げた。T Cの子が言ったあの子が指しているのはBの子だけ、その中にはAの子も入るということでもいいですね。これで一休さんが困っていることがはっきりしたわけだ。どう考えていいたら、どの子が正直村の子だとわかるかを、これから考えていこう。まず最初に、Aの子はなんと言ったか。

C わかんない。

T Aはなんと言ったかを頭を働かせて考えよう。

◎ ここではまだ、うそつき村の子はうそしか言わない、正直村の子は正直しか言わないという前提条件が把握されていないために、Aの子がどちらの村の子であっても、結果的には「ぼくは正直村の子だ」と言うのだということを考え出せない。

T BとCの子が言っていることはここに書いてあるようにわかるね。Bは正直村の子って言っている。

C は正直村の子って言っている。同じでいいですか。ちがう。

へ板書したところに、正直村の子には黄色のカード、うそつき村の子には赤色のカードをはりながら整理した。

T Bの言ったことからするとAは正直村の子。でもCの言ったことからするとうそつき村の子。Bは自分で正直村の子と言っているから正直村の子。でも

Cの子の言ったことからするとうそつき村の子。Cの子は自分で正直村の子と言っているから正直村の子。これでいいですか。

藤本 ぼくはBとAがうそつき村で、Cが正直だと思えます。Cは、だれにもうそつき村と言われていないけど、BとAはCが言っているからです。

T 自分が言ったのだから正しいというわけね。自分で言ったのだから正しいというのと、BだってCだって自分で正直だと言っているから、正しいということになるよ。

C むずかしいな。

T Aの子のことも考えてみよう。Aの子はなんて言ったの。

C 言ったけど聞こえなかった。

T Aの子がなんと言ったか、どうやったらわかるのかな。

◎ ここでもまだ、Aの要素を捨て、BとCが言ったことだけから考えようとしている。

T 藤本君は、BとCが同じ色だと困るんですね。

藤本 はい。CとAが同じことになるといことは、

Cはあの子はうそつき村の子だと言うんだから、Bはあの子は正直村の子と言ったんだよと言っているから、Aもうそつき村になるからA。

◎ 「Aの子はうそつき村の子である」「Aの子は正直村の子である」という二通りの仮定を立てることができが、「Aの子はうそつき村の子である」という仮定に立った場合、Cの言う「あの子」がAだとすると、BもCも正直村の子であるという論理が

成り立つ。藤本君はこの論理を逆方向から考えている。ただし、Aの子が正直村の子でも、うそつき村の子でも、結果的には、「ぼくは正直村の子だよ」

と言う点を把握していないために、Aの子を指して「あの子は正直村の子だと言ったんだよ」と言ったBがうそつき村の子で、「あの子はうそつき村の子だよ」と言ったCが正直村の子であるという論理を立てることになった。

C わけがわからない。

C わたしはよくわかりません。

T Cが正直村の子なら、Bはうそつき村の子であると藤本君が言ったんだね。

C どの子がうそつき村か正直村かがわかりません。

UT おじさんが言おう。BとC二人の子が言った、そのどっちが本当を言ったのか、どっちがうそのことと言ったのか、それを見つけることをやっていると。藤本君は、Cが本当のことを言っていて、Bがうそを言っていると考えはじめた。みんなが考えるのは、どっちがうそで、どっちがほんとうかを決めることでしょ。さあ、それを考えてどっちか決めるよ。

C わけも言うの。

UT わけはあとでもいい。

UT ぼくは、CはうそでBが本当。

UT 藤本君のとちがうね。これが藤本式で、これが川添式だね。藤本君と川添君が二人で行ったらけんかするね。

川添 お前あっち行け、おれこっち行くよ。

UT それで行っちゃうの？

川添 ううん。

UT 藤本君は川添君に、川添君は藤本君に、考えた理由を言わなくちゃね。他には？

C えっと、藤本君のやり方と、川添君のやり方と、二つあるからぼくはどっちかがわからない。

C わたしは川添式とだいたい同じです。

吉川 よくわかりません。

UT じゃおじさんが助太刀。BとCはいつまで考えてみても反対の考えだから、きりがいいから、一応はっておこう。これはいくら考えても、どちらが正しくて、どちらがうそかわからない。両方が反対のことを主張しているんでしょ。問題はAの方。こっちの方から考えたら解けるのではないかと考えたんだと思うよ、一休さんは。ところが一休さんは「もう一度言ってくれ」とは言わなかった。自分の頭の中で、これはこれだと考えた。さあ、こっちから考えよう。

T しならの考えを使って考えてみよう。Aが正直村の子なら、自分のことをなんて言いますか。

C 正直村の子。

C ぼくは正直村の子。

T どうして。

C 正直村の子は正直を言うから。

T Aがうそつき村の子なら？

C 正直村の子。

T どうして。

C うそつき村の子はうそを言うから。

◎ ここではじめて、正直村の子は正直しか言わない、うそつき村の子はうそしか言わないという前提条件が、把握された。

UT ていねいにやるよ。Aの子が正直村の子なら、Aの子は正直と言う。もしAの子がうそつき村の子なら？

C 正直村。

UT うそつき村の子だったらうそつき村の子だって言いますか。

C 言わない。

UT そうだね。うそつき村の子だって言ったら、うそつき村の子でなくなるね。じゃあこのAさんは、何と言ったか。

C 正直村。

C 正直村、自分は正直村の子です。

UT そうだと思えば手を挙げてごらん。

C 全員挙手。

UT そうじゃないと思う人も手を挙げてごらん。

UT 挙手する子なし。

◎ わからない、わからないと思って、あなた方は、これを全然考えようとしてなかった。聞こえないのしょうがないかと思ってた。Aが言ったことはわからないかと思ってた。Aが言ったことはわからないかと思ってた。Aさんが何をしゃべってなければならなかったことが、一休さんには、バツとわかったんだね。みんな自分の頭に自信を持ちなさい。聞こえなかったことも、頭を働かせればわかるんだね。

T Aのことばかり考えて、BとCのどちらが正直村の子か言ってください。

吉川 Aが正直村の子でもなら、「あの子は正直村の子と言ったんだよ。ぼくも正直村の子だよ」Aが、あの子は正直村の子だよと言ったのは本当だから。だからBが正直。

T 藤本君に聞いてみよう。

T 藤本 ぼくは、やっぱり川添君の正しいと思う。わけは、吉川君が言ったとおりです。

T 他の人はどうですか。

C わたしも川添式がいいと思います。考え方も吉川君のいいです。吉川君の考えは、Bが「あの子は正直村の子だと言ったんだよ。ぼくも正直村の子だ

よ」だし、Aは、正直村の子とも、言ったからです。

T 今度は川添君。

川添 わかんないんだよなあ。

T もう一人、だれか言ってもらいます。

C わたしも川添君の方でいいと思います。わけは、吉川君と同じです。吉川君は、Bは「Aは正直村と言ったんだよ。ぼくは正直だよ」と言って、Aは正直だよ、と言ったから。

川添 Aは正直だと言って、Bも、Aは正直村の子だと言ったから。

T 一休さんはだれに道を聞けばいいの？

C AかBかどっちか。

C AかB。

吉川 AかB。

C AかB。

C AかB。

吉川 AかB。

C AかB。

C AかB。

UT これで一休さんは正直村に行けるね。とても長い時間よく考えられました。

◎ (終了のあいさつ) 子どもたちは長い時間、BとCの発言をもとにして、そのいずれかが正直村の子だということを、くり返し考えていた。Aの問題に立ち返るまで、非常に長い時間がかかったわけである。それが、Aの問題に返り、結果的にAは「ぼくは正直村の子だよ」と言うことが把握できるやいなや、Bが正直村の子だという論理を組み立てることができた。

へ山本妙子(山口・城南小・教諭)

T 山本妙子・葛西琢也・市山仁美・小林照子

UT 上原輝男

◎は研究協議会記録をもとに小林がまとめたもの